

よしくら まこと  
 本会名誉顧問 吉倉 真先生

— その略歴と功績 —

会長 西岡 鐵夫

〈はじめに〉

わが熊本野生生物研究会の名誉顧問、熊本大学名誉教授吉倉真先生が、去る平成15年3月27日午後1時10分、岐阜県各務原市かがみきはらの入院先の病院で、老衰のため亡くなられた。享年92歳。

—— 謹んでご冥福をお祈り致します ——

先生は永きにわたって生物学の教育、研究に努められ、多くの有為な人材を育てられた。熊本県にあっては野生動物界の泰斗、名実共にその最高の権威であった。同時に先生は、私たち生物学徒にとっては得難い指導者であり、まさに動物学の生き字引的存在でもあった。

そんな先生だけに、当然県内生物関係研究会や同好会など、多くの会の顧問をしておられたが、特に本会への関心は強く、愛着も一入だったと自負をしている。顧問をされていた他の会で「野生生物研究会を見習いなさい」とよく言われていたからである。

先生からこれほどまでに愛され、期待されていた本会である。その報恩の一つでもとこれを筆録し、会員一同改めて先生の経歴、功績を鑑み、崇敬、追憶、また追悼の念を新たにしてもらいたい。併せてこの記録が、何時までも本会に残ることを願って、会誌に留めることにした。

〈生い立ち〉

先生は明治44年10月7日福井市に生まれる。実父は、京都帝国大学工学部卒のエリートであられたが、単身満州（現中国東北地方）へ技師として渡ると、すぐその地で客死された。

そのため母親は、幼い先生を連れて東京の工場などで働いておられたが、樺太、大泊（樺太は現サハリン。北緯50度の線を界して、北はソ連領、南即ち南樺太は日本領。大泊は現コルサコフ）の家具商、金次郎氏の後妻になられた。大変お綺麗な方だったときく。

先生はその時、まだ小学校に上がったばかりだった。やがて中学生時代になると、脊椎を病んでいた養父に代わり、荷台に家具を載せ配達などしておられたという。

その頃先生の家の裏には芸者屋があった。樺太まで流れてきた芸者たちの中にも学のある人がおり、いろんな本を読んでいた。そんな人が、先生に著名な外国の文学書を貸してくれたらしい。先生はそれをむさぼり読んだ。そのためか、中学生の先生には文学の才が長じ、「真夏の街灯の下にて」と題する一文が、白鳥正吾の同人誌に採用された。このことは先生生涯のご自慢だったらしい。

そういえば、熊本紳士録に先生のご趣味は俳句とあった。やはり“三つ子の魂百まで”である。しかし残念ながらその俳句の一句も拝聴していない。これも日頃のご謙虚のせいだろうか。ところが幸いご長男の廣氏が、阿蘇の草原に寝ころんでひねられたという一句の後半を覚えておられた。上の句は忘却の彼方とか、またしても残念であるが、とにかく下の句だけでも紹介しておこう。

「——— 雲うごき行く 草千里」 何だか雄大な阿蘇の風景より、壮大な先生の心根を思い浮かせるものがある。

〈略歴〉

昭和3年3月、当時日本領南樺太における唯一の中学校、名門樺太庁大泊おおどまり中学校（旧制）を卒業、つづけて同5年3月、大泊中学校付設小学校教員講習所本科を卒業、ただちに知取ちとり（現マカロフ）の樺太公立知取尋常高等小学校の訓導を命ぜられた。

翌昭和6年4月、兵役の義務で短期現役兵として北海道旭川歩兵27連隊に入隊、同年8月、現役満期。この5ヶ月間で歩兵二等卒（陸軍最下位の階級）から歩兵伍長（下士官）まで昇進されている。当時中学校以上の学歴を有する者は、下士官候補生（乙種幹部候補生）として、任期も昇級も優遇されていたからだ。それから1年、第1国民兵役に編入。日本は戦前まで兵役の義務が厳然として存在していたのである。

昭和7年10月、再び知取尋常小学校に戻り、教鞭をとられるが、その一方で、南樺太の動物の研究などをされている。同10年8月、文検（旧制の文部省教育検定試験）の動物学科に合格、旧制の師範学校、中学校、高等女学校の教員免許を取得された。

そのため1年半後の昭和12年3月、樺太公立大泊高等

小学校へ転勤、同時に4月には樺太庁大泊中学校博物科(今の生物)の教授を嘱託されている。そして同14年10月、晴れて母校の大泊中学校の教諭になられたのである。

しかし先生の動物学への研究心は去り難く、さらなる向学心に燃えて、同16年4月、樺太へ再帰することを約束され、大泊中学校を依願退職、ただちに広島文理科大学へ入学された。

この中学校勤務時代の1年半は、わずかな期間だったとはいえ、先生にとってはクモの研究にとりかかれた時であり、あの素晴らしく、また賢明な奥様(桃世夫人)と結ばれた時でもあった。同僚の教師に奥様のお姉さまがおられた関係の縁らしい。後年先生が著された「クモの不思議」には、結婚間もない桃世夫人が描かれた図版も入っている。

ともかく先生は、奥様、長男廣様を連れて広島へ移り住み、広島文理科大学生物科(動物学専攻)に入学された。やがてこの年、昭和16年12月8日に太平洋戦争がはじまるのである。この戦争中、同18年9月、大学を卒業。先生はまだ研究に未練のご様子だったが、約束を忠実に果たされるため、再び樺太に戻るようになった。その時広島に住んでおられた家のすぐ近くに原爆が落ちたのが、なんとそれから2年後のこと。もうその家は跡形もない。

樺太に戻った先生は昭和18年9月30日、直ちに樺太師範学校の助教授に命じられた。樺太師範は、当時豊原市(旧日本の樺太庁所在地、現サハリン州の州都ユジノサハリンスク)にあった樺太最高学府である。また同19年6月からは、樺太青年師範学校助教授も兼任しておられる。

かくして昭和20年8月15日を迎えた。この日は、日本が連合国に降伏し、お互いの戦闘行為が停止された日である。しかし樺太はまだ戦闘が続いていたから悲惨だった。1週間前(8月8日)に、日本に宣戦布告したソ連軍が、いまだに南樺太を蹂躪していたのである。

風雲急を告げ樺太からの退却は婦女子が優先となった。それで母上、奥様、お子さんたちは、心ならずも先生一人を残し、貨物船で何とか北海道に引き揚げられた。しかしもはやその時の情勢は、直後に出た引き揚げ船が、ソ連の潜水艦に撃沈されるといった険悪この上ない、まさに南樺太存亡の秋であった。

残された先生は漁船に涉りをつけた。ところがこの漁船脱出も、多くの方がソ連沿岸警備隊に見つかり殺されている。しかし先生がこの方法で辛うじて樺太脱出に成功できたのも不幸中の幸いというべきであろう。まったく身一つ、命からがらの脱出であった。

先生が内地に引き揚げ、ご家族5人に再会されたのは、

その年の昭和20年、雪の降る冬の日であった。この時ご一家の仮住まいは、島根県三刀屋のかたいなか、空屋になった診療所であった。(三刀屋は出雲市の南東約10km)

それから半年、飢えを凌ぐため米、味噌を調達することに精一杯の毎日であった。これは日本中どこも同じで、当時の食料不足は、筆舌に尽くし難いものがあった。

そんな中、先生はご長男を連れて山に行き、落ちた渋柿の甘さ、焼いた赤蛙の美味を楽しまれたという。殺伐とした飢餓の日々に何だか救われたような風景である。

昭和21年春、ご一家は、奥様の実家がある島根県和木に移られた。(和木は江川河口の江津から南西約2kmにある小さな漁村)そこで先生は同年4月から9月まで、島根県立大田中学校の講師をなさっている。

そしてこの秋、昭和21年11月、嬉しいことに今はソ連領となり最早存在しない樺太師範学校の教授昇任の辞令が遡って発令されたのである。学校は消えても人材は残る。この辞令はまさに「国破れて山河在り」である。今更ながら杜甫の「春望」に感心し、日本の有難さを痛感する。

かくして先生は、翌昭和22年2月、熊本師範学校教授として、それこそ縁もゆかりもない熊本の地へ赴任、そして熊本でのご活躍が始まった。

昭和24年10月から半年間、師範学校在籍のまま、東京大学理学部動物学教室に内地留学。因みにこの昭和24年は、9月1日に熊本師範学校、第五高等学校、熊本医科大学、熊本工業専門学校など7つの学校が包括され、新制熊本大学が発足した年である。しかし包括されたそれらの学校には、まだ新3年生が在学していたりして、旧制の学校は、そのまま昭和25年3月まで存在していた。

そんな理由で、先生は同26年3月、旧制師範学校から新制熊本大学へ配置転換、それも教育学部でなく理学部助教授に昇任して生物科に異動された。

昭和30年2月15日、母校広島大学(広島文理科大学)より理学博士の学位を授与される。

昭和31年より10年間は熊本女子大学の非常勤講師もされているが同37年4月、熊本大学一般教育課程(教養部)担当教官となり、同39年4月、その教養部において教授に昇任された。

当時、創設まもない教養部生物学教室の整備充実に尽力されたのも先生であった。

昭和41年5月、熊本大学大学院理学研究科担当となり、元の理学部に併任。7月にはその併任も解除され理学部に配置換え、脊椎動物比較形態学などの講義をされる。同時に熊本大学理学部附属臨海実験所長を併任された。

この併任に伴い、先生は早速臨海実験所の増築拡張、内部施設の整備充実に多大な尽力をされた。そして3ヶ

月後の同41年10月、天皇（昭和天皇）・皇后両陛下を晴れて実験所にお迎えしたのである。この時先生は、両陛下をご案内、ご説明するという光栄に浴された。その1年半後の同43年4月、またもや皇太子・皇太子妃（現天皇・皇后）両殿下を実験所にお迎えし、ご案内、ご説明の栄えある大役を果たされたのである。先生のこの所長併任は同47年6月まで続いた。

昭和52年4月1日、めでたく熊本大学を定年退官、同日付をもって熊本大学名誉教授となられた。

退官後は昭和52年から同53年まで熊本大学医療技術短期大学部講師、同54年から同60年まで熊本大学理学部講師を務められている。

先生の26年に亘る熊本大学助教授、教授の現役時代は、研究、講義のほか意外にも多く学内委員などの要職に就かれている。また学外にあっては、現役、退職後とも県・市関係の多彩な委員の委嘱を受け、一般社会への奉仕活動に貢献されている。なかでも博物館協議会委員としては、筆者が博物館勤務だっただけに、先生との子弟関係が続き、常にご指導を仰ぐことができて有難かった。

以下この「熊本大学内委員など」と「県・市関係委員」を時系列に列挙しておく。

〔熊本大学内委員など〕

- 昭和31年 昭和31年度理学部物品検閲委員
- 〳 34年 昭和35年度熊本大学入学試験委員
- 〳 37年 熊本大学入学試験学力検査委員会委員
- 〳 〳 熊本大学学力検査委員会昭和38年度部会委員
- 〳 39年 熊本大学入学試験学力検査委員会部会委員
- 〳 40年 熊本大学入学試験学力検査委員会部会委員
- 〳 41年 熊本大学入学試験学力検査委員会部会委員
- 〳 〳 熊本大学入学試験学力検査委員会委員
- 〳 42年 昭和42年度熊本大学医学部附属看護学校入学試験委員
- 〳 〳 熊本大学入学試験学力検査委員会部会委員
- 〳 43年 昭和43年度熊本大学医学部附属看護学校入学試験委員
- 〳 〳 熊本大学教養部運営協議会委員
- 〳 〳 熊本大学入学試験学力検査実施教科専門委員会委員
- 〳 〳 熊本大学入学試験管理委員会委員
- 〳 〳 熊本大学入学試験学力検査委員会部会委員
- 〳 46年 (文部大臣)教科用図書検定調査審議会調査員
- 〳 50年 熊本大学大学院委員会委員

〔県・市関係委員〕

- 昭和34年～平成11年 熊本市立熊本博物館協議会委員
- 昭和37年～昭和51年頃 熊本県文化財専門委員
- 昭和51年頃～平成4年 (熊本県文化財専門委員)熊本県文化財保護審議会委員
- 昭和38年～昭和48年頃 熊本県鳥獣審議会委員
- 昭和48年頃～平成元年 (熊本県鳥獣審議会委員)熊本県自然環境保全審議会委員
- 昭和50年～昭和61年 熊本県国土利用計画地方審議会委員
- 昭和56年～平成2年頃 熊本県鳥獣保護センター運営協議会委員

なおこのほか熊本市の水前寺江津湖公園整備実施計画研究会、動物園整備研究会、自然環境保全問題懇談会など随時出席。

〈研究、業績など〉

先生の研究や業績は多岐にわたり、動物学のほか植物学にも詳しく、晩年には民俗学などにも興味をお持ちのようだった。

ともあれここでは、先生ご専門の動物学への業績を、四つの分野に大別してみた。

第一は、節足動物、蜘蛛類の発生、進化それに形態、分類の研究である。

先生はクモ類研究の世界的権威であり、日本におけるクモ類研究の草分け的な存在であった。特に生きた化石ともいわれる原始的なキムラグモの発生の研究は、日本より外国の方でよく知られ、世界の教科書に引用されているくらいである。このクモ類の発生の研究ではクモ類の個体発生、系統発生の基礎を作られたのである。

一方、クモ類の進化の研究では、下等なクモ類が暗がりの穴居生活を脱し、普通のクモ類などのように白日下の生活に移ったと説かれ、紫外線が与える影響についてそれを実験的に実証しておられる。

またキムラグモの目の構造、ジグモの腎細胞の構造など形態学的研究やその他 Arachnida (蜘蛛類)でも Araneae (真生クモ類)にかぎらず Uropygi (サソリモドキ類)のサソリモドキの研究などもある。

以下にこの分野における先生の論文、報告文を発行年、題名、掲載誌、発行所順に時系列に列挙しておく。

---

1939	アカオニグモの生活史	Acta Arachnol 4巻 2号 東亜蜘蛛学会
1940	アカオニグモの円網	Acta Arachnol 5巻 2号 東亜蜘蛛学会
1941	樺太産蜘蛛類 黄金蜘蛛科 生態と分類	樺太時報No.55 樺太庁
1952	Preliminary notes on the development of the liphistiid spider, <i>heptathela Kimurai</i> KISHIDA	広島大学理学部紀要 広島大学理学部
1953	キムラグモ <i>Heptathela Kimurai</i> の卵嚢作りと産卵について	Atypus 3 東亜蜘蛛学会
1954	On the trachea in a liphistiid spider, <i>Heptathela Kimurai</i>	Kumamoto J. Sci. Ser. B. No.3
1954	Embryological studies on the liphistiid spider, <i>Heptathela Kimurai</i>	熊本大学理学部紀要 熊本大学理学部
1955	Embryological studies on the liphistiid spider, <i>Heptathela Kimurai</i>	熊本大学理学部紀要 熊本大学理学部
1958	On the development of a purse-web spider, <i>Atypus karsohi</i> DÖNITZ	熊本大学理学部紀要 熊本大学理学部
1958	サソリモドキの生殖習生	Acta Arachnol 16巻 1号 東亜蜘蛛学会
1961	サソリモドキの発生	Acta Arachnol 17巻 2号 東亜蜘蛛学会
1965	Postembryonic development of a whip scorpion <i>Typopeltis stimpsonii</i> (WOOD)	熊本大学理学部紀要 熊本大学理学部
1966	台湾産サソリモドキとアマクササソリモドキについて	Atypus No.39 東亜蜘蛛学会
1966	日本産サソリモドキの研究	熊本大学教養部紀要 自然科学編第1号 熊本大学教養部
1969	Effects of ultraviolet irradiation on the embryonic development of a liphistiid spider, <i>Heptathela Kimurai</i>	熊本大学理学部紀要 熊本大学理学部
1972	Notes on the development of a trap-door spider, <i>Ummidia fragaria</i> (DOENITZ)	Acta Arachnol 24巻 1号 東亜蜘蛛学会
1972	Neurosecretory system of the purse-web spider, <i>Atypus karachi</i> DOENITZ	熊本大学理学部紀要 熊本大学理学部
1973	Whip-scorpions of Japan	熊本大学理学部紀要 熊本大学理学部
1975	Comparative embryology and phylogeny of Arachnida	熊本大学理学部紀要 熊本大学理学部
1977	ウツキコモリグモの卵嚢除去による産卵の促進	Acta Arachnol 27 東亜蜘蛛学会
1982	ササグモの貞操帯	Hepta thela 2巻 2号 九州蜘蛛の会

---

第二は、両性類（主にアカガエル属）の内分泌的研究、即ち両生類の性分化、性転換に関する実験的、形態学的研究である。

例えば性分化に2型があることや、脳下垂体ホルモン、甲状腺ホルモンによる性の転換、また卵の過熟、高温処置による性の転換その他である。蝌蚪（オタマジャクシ）の gonads の発生に、高温が及ぼす影響などはその一例である。このような発生学的研究も多い。SIGN POST Vol.18 No.2 に書いた♂蛙の脳下垂体前葉を♀蛙の皮膚下に埋没させ、♀蛙の排卵を促進させる Ovulation は、その具体的別例である。

以下この分野における先生の論文、報告文を発行年、題名、掲載誌、発行所順に時系列に列挙しておく。

1943	樺太山椒魚の生態二三	植物及動物	10巻	8号	養賢堂
1951	ヌマガエル雄の性分化	動物学雑誌	60巻	11号	日本動物学会
1952	ヌマガエルに見出された卵巢辜丸の組織学的研究	動物学雑誌	61巻	5号	日本動物学会
1952	ヌマガエルの生殖腺の分化に及ぼす性ホルモン物質の効果	動物学雑誌	61巻	11号	日本動物学会
1953	The fate of testis-Ova in <i>Rana Limnocharis</i>	広島大学理学部紀要	広島大学理学部		
1955	再びヌマガエルに見出された卵巢辜丸について	動物学雑誌	64巻	7号	日本動物学会
1959	The action of the pituitary in sex differentiation and reversal in Amphibia, I. Sex differentiation of hypophysectomized frog larvae	熊本大学理学部紀要	熊本大学理学部		
1959	Ditto. II. Effects of high temperature on the gonads of hypophysectomized frog larvae	熊本大学理学部紀要	熊本大学理学部		
1960	Effects of administration of thyroid hormone upon the growth and development of gonads of hypophysectomized frog larvae	熊本大学理学部紀要	熊本大学理学部		
1961	The action of the pituitary in sex differentiation and sex reversal in Amphibians. III. Induction of gonad masculinization by pituitary grafts in the heat-treated hypophysectomized frog larvae	熊本大学理学部紀要	熊本大学理学部		
1962	Effects of estrogens on the gonads of hypophysectomized frog larvae, with special reference to the time factor in the responses of sex primordia	熊本大学理学部紀要	熊本大学理学部		
1963	蛙幼生の性転換における脳下垂体の影響	動物学雑誌	72巻	1号	日本動物学会
1963	The role of the thyroid and pituitary glands in sex reversal in the frog tadpole	熊本大学理学部紀要	熊本大学理学部		
1963	Influence of high temperature on the development of gonads of thiourea-treated frog tadpoles	熊本大学理学部紀要	熊本大学理学部		
1968	The effect of thyroxine upon the sex differentiation of thyroidectomized frog tadpoles	GUMMA	群馬大学内分泌研究所		
1968	ヌマガエルの過熟卵の発生について	熊本大学教養部紀要	自然科学編第3号 熊本大学教養部		

第三は、脊椎動物における生態学的手法による動物相の解明である。

旧日本領の南樺太においては、食虫動物やコウモリ類の報告、また新種のコウモリやナキウサギの発見などがある。

熊本県においては、阿蘇、菊池、球磨、五木、五家荘、

天草、芦北など県内各地の脊椎動物に関する報告文がある。

以下この分野における先生の報告文を発行年、題名、掲載誌、発行所順に時系列に列挙しておく。

1933	南樺太知取附近動物相の研究	樺太知取小学校
1933	樺太に産するハツカウサギに就いて	教育教育8巻6号 樺太庁
1938	コモチカナヘビの Breeding habits に就いて	植物及動物6巻4号 養賢堂
1944	樺太産ホホヒゲカウモリの新種	動物学雑誌56巻(1, 2, 3) 日本動物学会
1944	アカタビネズミ <i>Myopus middendorfi</i> 樺太に産す	動物学雑誌56巻(1, 2, 3) 日本動物学会
1955	南樺太のトガリネズミ	広島生物学会誌6巻2号 広島大学
1956	Insectivores and bats of south Sakhalin	熊本大学理学部紀要 熊本大学理学部

1967	久連子鶏	熊本県文化財調査報告第8集 熊本県
1969	注目すべき県産小獣	会報69号 自然と文化を愛する会
1975	塚原古墳群出土の馬歯	熊本県文化財調査報告16集 熊本県
1978	天草の鳥類 (大田真也と共著)	熊本県の野鳥 熊本県
1978	天草の哺乳類	Calanus 6 熊本大学理学部附属臨海実験所
1982	菊池溪谷の哺乳類 (荒井秋晴と共著)	菊池溪谷の動物 熊本洞穴研究会
1984	熊本の陸生哺乳動物 (1) 研究史と陸生哺乳動物	土龍11 熊本洞穴研究会
1986	江津湖の両生類	くまもと自然シリーズ江津湖の自然 熊本生物研究所
1988	熊本の陸生哺乳動物 (2) 分布と実態	土龍13 熊本洞穴研究会
1991	阿蘇菊池溪谷の両生・爬虫類	くまもと自然シリーズ阿蘇菊池溪谷の自然 熊本生物研究所
1993	熊本県の脊椎動物	熊本県の動物 熊本自然・文化資料集成V 熊本市立熊本博物館
1993	天草の両生類	くまもと自然シリーズ 天草の自然 熊本生物研究所

第四は、環境破壊に伴う生物種減少への警鐘及び、環境保全・自然保護思想の啓蒙と普及である。

熊本を生涯の地と決意された先生は、熊本の自然を丸ごと受け止められ、郷土を愛し、郷土の自然を憂慮されていたのである。先生の愛護思想は、熊本の自然保護活

動の基礎を作り、多くの後継者たちに受け継がれている。

以下この分野における先生の報告文を発行年、題名、掲載誌、発行所順に時系列に列挙しておく。

1968	熊本県南帯区山地の動物	自然公園調査概要書 熊本県観光課
1969	人吉球磨五木五家荘地区の鳥獣類	人吉球磨五木五家荘地区自然公園候補地学術調査報告書 熊本県
1972	南阿蘇登山道計画が動物に及ぼす影響について	謄写 熊本県企業局
1973	北向山の鳥獣 白川ダム建設が北向山天然林に及ぼす影響の調査 (林敏雄と共著) 中間報告	熊本県自然保護課
1974	北向山の鳥獣 白川ダム建設が北向山天然林に及ぼす影響の調査最終報告	熊本県自然保護課
1977	阿蘇の動物 (脊椎動物)	阿蘇国立公園学術調査報告書 熊本県
1978	哺乳類調査 (荒井秋晴と共著)	追間川流域の自然環境調査 熊本野生生物研究会
1979	天草諸島陸棲哺乳動物	天草地方と長崎県南部の哺乳類・鳥類の生息状況調査報告書 西日本技術開発株式会社
1979	五木を中心とする九州山地の動物概要	川辺川流域総合予備調査報告 川辺川流域総合予備調査団
1981	小岱山とその付近の哺乳動物	小岱山県立公園計画の再検討に関する調査報告書 熊本開発研究センター
1982	金峰山の哺乳動物	金峰山公園計画再検討調査報告書 熊本開発研究センター
1982	熊本の野生動物 熊本の自然	熊本大学放送公開講座 熊本大学
1984	哺乳動物	熊本市自然環境調査報告書 熊本開発研究センター
1985	芦北海岸県立自然公園および周辺の哺乳動物	芦北海岸県立自然公園計画再検討調査報告書 熊本開発研究センター

〈叙勲, 受賞, 表彰〉

先生の生涯は、研究一途、研究に全身全霊を打ちこまれた人生であった。しかしその研究対象が、直接人の生活に結びつくものでもなかったため、一般の人にはあまり知られることもない研究成果であった。

またお人柄も万事地味で控え目だったため、派手にマスコミに騒がれるようなこともなく、これまた一般の人の目には触れることもないご存在であった。

それにも拘らず先生の学術的研究成果や、隠れた社会貢献、自然保護精神は、次第に世間に注目されるようになり、高く評価されるに至った。叙勲はもとより受賞、表彰でそのご功績が顕彰されている。

以下「叙勲」を筆頭に「受賞, 表彰」は時系列に列挙しておく。

〔叙勲〕

昭和59年11月3日 勲三等旭日中綬章受章

〔受賞, 表彰〕

- 昭和38年11月23日 熊本大学永年勤続者表彰受賞
- 昭和54年6月30日 熊本日日新聞社「熊日賞」受賞
- 昭和54年11月9日 熊本市長より「有功賞」受賞
- 昭和57年9月19日 熊本市教育委員会より「熊本博物館の運営発展に貢献」として表彰
- 昭和60年10月28日 文部大臣より「社会教育功労者」として表彰
- 昭和63年2月6日 著書「クモの生物学」にて熊本日日新聞社より「熊日出版文化賞」受賞
- 昭和63年5月15日 環境庁長官より「野生鳥獣保護功労者」表彰

〈会長, 顧問, 名誉会員〉

先生が動物学の権威だったために、県内生物関係の研究會、同好會など多くの会の顧問をされていたことは冒頭に書いた。しかしこのほか、県内外の会でも会長をなさっていたり、名誉会員であったりされている。そして律儀にも、その職務を最後まで全うされているのである。

以下「会長」, 「会長より顧問」, 「名誉顧問」, 「顧問」, 「名誉会員」の別に列挙しておく。

〔会長〕

九州クモの会会長

〔会長より顧問〕

熊本洞穴研究会会長→同顧問  
熊本野鳥の会会長→日本野鳥の会熊本県支部顧問

〔名誉顧問〕

熊本野生動物研究会顧問→熊本野生生物研究会名誉顧問

〔顧問〕

肥後ちゃほ保存会顧問

〔名誉会員〕

(東亜蜘蛛学会) 日本蜘蛛学会名誉会員  
日本節足動物発生学会名誉会員

〈著 書〉

先生は、共著でない本を3冊出されている。次にそれを並べ、3冊各々につきその内容その他を私なりに簡単に紹介しておく。

1982 (昭和57年) 7月 クモの不思議  
岩波書店 210頁 岩波新書(黄版) 197 380円

1987 (昭和62年) 9月 クモの生物学  
学会出版センター 650頁 B5 19,000円

1989 (平成元年) 3月 熊本の自然そして両性類の性分化  
熊本日日新聞情報文化センター 178頁 B6 1,800円

〔クモの不思議〕

蜘蛛の生活を進化という観点から書かれた原稿用紙300枚の文庫本である。先生はこの本を1年で書き上げたというから驚異である。もっともそれは、手元に「クモの生物学」と題された約2000枚の原稿があったからということだ。

巧みに巣をつくって虫をとり、求愛、結婚、産卵、子育てなど懸命に生きていく蜘蛛たちの姿を、ありありと描写されているのは面白くまた素晴らしい。

先生は「人に好かれる動物じゃないし、売れるかな」と心配されたらしいが、案に相違して40万部も売れたという。

この本に新婚間もない奥様の描いた図版が入っているのは前述したが、悲しいことに先生は、この本を執筆中、慈愛深き母上(ナツ様)を亡くされている。

〔クモの生物学〕

この本は、蜘蛛に魅せられ蜘蛛に傾注された先生の半世紀余にわたる研究の集大成である。前に「クモの不思議」を脱稿された時は、既にこの本のラフな原稿は完成されていたという。

専門書ではあるが、一般の人にも興味深く読まれ、読者の層は厚い。

ご自分の研究論文はもとより、国内外の文献1500点余、それに多方面にわたるアマチュア愛好者からの報告例も多く紹介されており興味深い。

この本で蜘蛛全般の知識が得られるのは当然だが、それよりも「人間と深い関わりをもつ愛すべき動物、蜘蛛にもっと親近感を！」という先生の願いが込められているような気がしてならない。

ところで“禍福は糾える縄の如し”というが、先生はこの本完成目前にして、またしても最愛の奥様、桃世様を失われている。

〔熊本の自然そして両生類の性分化〕

前編「熊本の自然」は、熊本日日新聞に昭和47年1月から半年間、毎週1回掲載された「きょうの発言」、また同新聞に昭和54年3月3日から6日間、連載された「週間随想」その他である。

「きょうの発言」は、動物や自然保護の歳時記ともいえるもので、楽しく軽妙なタッチの中、新しい発見に驚かされる。

「週間随想」は、“よりよい環境に”という題の下、阿蘇、天草、江津湖など熊本の美しく貴重な自然を踏まえて、その保全の大切さや自然学習の必要性など多くの提言をなされている。またその他、自然保護と熊本の爬虫類・両生類について書かれている。

後編「両生類の性分化」は、先述した〈研究・業績など〉の第二の分野、両生類研究の概要を、やさしく誰にでも理解されるように書かれたものである。

例えば、ヌマガエルでは変態後の幼蛙は早ばかりだが、秋頃成蛙になる時は、その性比がほぼ1:1になる。ところでツチガエルでは、蝌蚪は早ばかりだが変態後幼蛙になる時は、その性比は、既にほぼ1:1になっている。つまりツチガエルは、ヌマガエルより遺伝的♂の性転換が早く行われるのである。

このほか性ホルモン処置による性の転換など興味深く、

その逆説的効果が生ずることなどは面白い。

〈おわりに〉

先生の真摯な学術のご態度、またその柔和で寛容な性格とはかく定評があった。そして何事でもよく語り、よく教えて下さった。しかし私事については、明治の美徳の名残りがあまり多くは語られなかった。

ところがここまで、先生の生い立ち、幼少時代、略歴その他、今まで私たちがあまり知ることのなかった一面を書いてきた。なかには先生の意に反することもあったかもしれない。しかし先生は「またアイツがやったか」と苦笑はされても怒りはされない筈、お許し下さることを確信している。

さて最後に、先生のご家族やお墓の所在を書いておく。ご遺族と交流されたり、上京の折、お墓参りされたりする際に役立てて戴ければ幸いです。

〔ご家族〕

母	ナツ様	命日	昭和56年11月17日	95歳
妻	桃世様	命日	昭和62年9月16日	76歳

長男	吉倉 廣様	元東京大学医学部教授、現国立感染症研究所長（平成16年3月退官）
	〒187-0042	小平市仲町644-29

長女	橋本和子様	岐阜聖徳学園大学短期大学部 生活学科教授
	〒504-0002	各務原市尾崎北町6-20

二女	佐藤豊子様	佐藤クリニック内科医師
	〒252-0863	藤沢市亀井野2520-25
		（ご主人共に医師）

〔お墓〕

埼玉県飯能市大字下直竹1002-1

飯能霊園

（JR八高線または西部池袋線にて飯能駅下車、駅より西約1km）

——先生にこの稚拙な一文を捧げ、謹んで哀悼の意を表します——